

## 自己点検・評価について

## ① プログラムの自己点検・評価を行う体制

大阪工業大学情報科学部教務担当委員会

(責任者名) 椎原 正次

(役職名) 情報科学部長

## ② 自己点検・評価体制における意見等

自己点検・評価の視点		自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
学内からの視点		
プログラムの履修・修得状況		教務担当委員会において、本教育プログラム対象科目の履修者データを基に、履修状況を分析し、プログラム修了をめざす学生の状況を把握している。本教育プログラムは2025年度から開設し、実績は2025年度の前期のみである。履修者が1年次のみのため、収容定員に対する履修率は当然低くなっているが、入学者数に対する履修率は100%に近く、非常に良好な結果となっている。
学修成果		シラバスでは授業計画で何を学ぶかを具体的に示し、適切な到達目標を設定している。独自アンケートでは、該当する授業回の理解度を問う設問により、学修成果を把握し、教務担当委員会で評価・改善に活用している。
学生アンケート等を通じた学生の 内容の理解度		本教育プログラム受講者全員に対して実施している独自アンケートの該当する授業回の理解度を問う設問により、学生の理解度を把握している。アンケート結果では概ね肯定的な意見が確認された。説明がわかりやすく学科の学びに応じた独自の資料を作成や授業後の小テスト実施など工夫を凝らした事例が寄与したと推察される。その一方、アンケート回収率が低調な科目も一部確認された。新しいアンケートの回収システムに変更されたこともあるが、回収率の向上に向けた改善が必要である。さらに、授業内はもとより、年次別に実施している履修ガイダンスにおいて、本教育プログラムの意義をより浸透させる。
学生アンケート等を通じた後輩等 他の学生への推奨度		本教育プログラム受講者全員に対して実施している独自アンケートには、該当科目の受講により「数理・データサイエンス・AIに関する知識や技能を身につける重要性の高まり」を問う設問がある。これにより、本教育プログラムを通して学んだことを後輩に伝え、推奨していく期待度を確認している。学科や該当科目によってばらつきが見受けられるが、5段階評価中の「かなり高まった」「ある程度高まった」の合計は、概ね7～8割を占めている。後輩に伝え受講を推奨していくことが期待できる水準であると考えている。一方で、より多くの受講生が重要性を理解できるように、授業改善を進める必要がある。
全学的な履修者数、履修率向上 に向けた計画の達成・進捗状況		本教育プログラムの対象は情報科学部であり、プログラムの対象となる科目の履修状況は、「プログラムの履修・修得状況」に記載のとおり非常に良好である。本教育プログラムを構成する科目のうち、1年次に配当している科目は、情報科学を学ぶ上で基礎となる科目である。そのため原則全員が履修することを推奨し、履修モデルに取り入れている。さらに、履修ガイダンスにて本教育プログラムの意義や構成科目を資料に基づいて解説することで、認知度および履修意欲の向上を推進している。各学科が開催する新入生オリエンテーションにおいても、これらの科目を履修することを進めている。

自己点検・評価の視点		自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
学外からの視点		
	教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価	<p>本学では、自己評価・IR委員会の小委員会において外部評価委員を加え、産業界の視点を含めた教育課程の検証が行える仕組みを整備している。本教育プログラムは2025年度以降の入学学生を対象としているため、修了者が輩出されるのは2028年度であり、現時点では修了者の進路・活躍状況等について適切な評価が可能となる段階には至っていない。</p> <p>一方で、将来的な評価に向けて、「卒業生アンケート」(卒業後3年目対象)や「企業アンケート」に関連する設問を設定しており、産業界のニーズや修了者に対する評価を把握する仕組みを整備している。これにより、プログラム修了者を輩出する前段階においても、可能な限り企業等のニーズの把握に努めている。今後は、修了者の輩出に合わせてこれらのデータを体系的に収集・分析し、教育プログラムの改善に反映していく予定である。</p>
	産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見	<p>本学では教育の質保証の一環として外部評価委員会を設置し、年1回の定期的な点検・評価を実施している。本教育プログラムにおいても同委員会にて評価や意見を収集する枠組みをを基本としつつ、必要に応じて外部評価委員から直接意見を伺うなど、柔軟に評価・助言を得る体制を整えている。2025年度は、プログラム内容や自己点検・評価の結果について対面で外部評価委員に説明し、産業界の視点を踏まえた助言を得た。その際には、「教育内容が社会ニーズに適合しており、独自アンケート結果から授業の分かりやすさが確認できる。今後もニーズの変化に応じて内容を適宜更新していくことを期待する。」や「初年度として良いスタートを切っている。」等の意見が示され、本プログラムの方向性に対して有益な示唆を得ることができた。これらの意見は教務委員会を通じて関係部局と共有し、教育プログラムの改善サイクルに反映していく。</p>
	数理・データサイエンス・AIを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させること	<p>本教育プログラム受講者全員に対して実施している該当する授業回の受講によりMDASHに対する興味・関心度が高まったかを問う設問により把握している。「かなり高まった」、「ある程度高まった」が概ね7～8割を占める結果となり良好である。本教育プログラムを構成する科目群では、一部はアクティブな手法(グループワーク等)を取り入れるなどの工夫がみられる。「価値創造演習a,b」および「情報科学実践演習(国内PBL)a,b」は、社会課題に対してデータサイエンス・AIを適用するPBLであり、学ぶことの意義、達成感による楽しさをより理解する機会になると考えている。さらに、所属学部学科の学びに即した実社会におけるMDASHの活用事例数を増やしていく等によって、既に一定の理解がある学生に対する向上策の検討も計画されており、今後の改善に期待ができる。</p>
	<p>内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とすること</p> <p>※社会の変化や生成AI等の技術の発展を踏まえて教育内容を継続的に見直すなど、より教育効果の高まる授業内容・方法とするための取組や仕組みについても該当があれば記載</p>	<p>独自アンケートを通じて、該当する授業回の授業が分かりやすかったかを問う設問により、学生の反応をダイレクトに収集している。「強くそう思う」「ややそう思う」が概ね7～8割を占める結果となり肯定的な結果となっている。さらに、当該授業に関する改善要望の有無を問う設問もあわせて収集している。数理科学については、解説だけではなく具体的な練習問題を解かせる時間を与えることで、理解度を高めている様子がわかる。クラス分割することで少人数クラスを実施している効果が表れている。今後は、所属学科の学びに関連付けた事例のさらなる導入、グループワークの活用、メディア授業を推進する。これらの成果については、情報科学部内のFDフォーラムで学部全体に共有し、プログラム全体の内容・水準の維持・向上を推進する。</p>